『フランス組曲』とウクライナ情勢、試されるEUの結束

主席研究員　山口 勝義

フランスの6月。1年で最も美しい季節。しかし第二次世界大戦下の1940年には、この月、前月からのドイツ軍によるフランス侵攻を受けて、パリから南や西を目指す市民の大脱出が始まった。列車には頼れず自動車もガソリン不足、多くは徒歩や自転車での脱出行である。かさばる荷物を抱えた避難民の長い列。食料難、体力の限界。そこに襲いかかるドイツ空軍の機銃掃射。庶民から富裕層まで、平時であれば通りすがりの関係しか持たない社会的背景の異なる人々が、緊密な接触を迫られる。その中での人間模様。恐怖と勇気。献身、連帯。一方で、体面の尊重、妬み、反目。フランス軍は指揮官を欠き武器もなく、大混乱に陥り潰走へ。6月後半には対独協力のヴィシー政権が成立し、早くも休戦に。フランスは分割され、ドイツ軍の駐留が始まる。表面上は落ち着きの回復。しかし、人々の心の奥底で強まる葛藤。そして事件の勃発に向けて、物事は静かに進んでいく・・・。

この『フランス組曲』の作者、イレーヌ・ネミロフスキーは1903年、当時はロシア帝国の領土であったウクライナのキーウ（キエフ）に生まれた。ロシア革命を逃れて一家でパリに移住し、第二次世界大戦とともに、さらにブルゴーニュに避難。しかし、ユダヤ人であるため1942年に捕らえられ、アウシュヴィッツで命を落とすことに。その後、娘に託されたトランクの中で長く眠っていた原稿が60年以上の歳月を経て見出され、2004年に本書が出版されると、その豊かな文学性と作者や原稿がたどった波乱に満ちた運命の双方から、多数の国で大きな反響を引き起こしたという。フランスでは同年、作者の没後に異例な扱いで権威あるルノード一賞を受賞し、後には映画化もされている。

さて、ロシアによるウクライナ侵攻は、その開始から8ヶ月が経過した。国土は破壊され、ウクライナ国民の苦しみは増している。『フランス組曲』に描かれた、短期間の、国内での避難以上に国民の苦しみは大きいはずである。そしてそればかりか、紛争の長期化とともに支援国側の負担も拡大していく。避難民の受け入れや、ウクライナへの経済面、軍事面での支援という直接的な負担のみではない。なかでも欧州では、エネルギー価格の上昇によるインフレ圧力の高まりの段階を越えて、必要なエネルギー量の確保にさえ支障をきたす段階へと、状況は着実に困難化してきている。この重みに耐えかねた国々で、国民が対ロシア制裁の緩和を迫る動きに出ることは十分に考えられるシナリオである。さらには、各国間で資源の争奪戦の様相が生じることもないとは言えない。これまでは共通の危機を前に強い協調姿勢が見られた欧州連合（EU）であるが、こうして今後は逆に自国第一主義が表面化し、各国間の分裂が露わになる懸念が生じている。紛争の終息が見通せない中でこの摩擦がますます拡大していき、EU統合の今後のあり方を左右することにもなりかねない。

かつて第一次世界大戦の主戦場となり疲弊した欧州では、台頭する米国に対する地盤低下や当時のソ連の脅威への対抗策として、またドイツの覇権回復への牽制の意味からも統合の動きが加速していった。しかし今回の紛争はEUにとり、これまでの求心力が遠心力に転じながらその結束が正面から試される、かつてない大きな試練となっている。近くは財政危機、難民危機、英国離脱、コロナ危機と、相次ぐ困難に直面しながらもこれらを乗り越えてきたEUがこの試練に打ち勝つことができるのか、冬場のエネルギー需要期を迎えて、欧州の情勢はいよいよ正念場に差し掛かっている。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます